

## 第10節 中原4号墳出土土師器の様相

佐藤 祐樹

### はじめに

中原4号墳において石室内から1点、周溝内から3点の土師器が出土している。埋葬年代については、土師器1点のみから年代を決定することは非常に難しく、石室内から出土した豊富な副葬品の年代からさせまる事になる。また、周溝から出土した土師器についても周辺遺跡における出土例から、その年代に迫っていくことしたい。

### 1 出土土師器について

石室内からは壺、周溝からは壺1点、小型壺2点が出土している。

石室内から出土した壺（656）は、石室の開口部側において、8点に割れて出土した。おそらく追葬時のかたづけ等により割れたものと考えられ、初葬時の遺物と考えてさしつかえない。木葉痕をもつ厚い底部から内湾しながら口縁部にいたる。見込みに放射状のヘラミガキが丁寧に施されている。口径14.2cm、器高4.0cm、底部径5.5cmを測る。

周溝から出土した土器については、その出土状況の詳細が明らかではない。壺（1）はいわゆる須恵器壺蓋模倣とされるもので、口径9.6cm、器高3.8cm、最大径10.4cmとやや小型な部類である。器壁は全体的に厚く、底部は丸底に仕上げられている。内外面ともに入念にヘラミガキが施され光沢をもっている。

小型の壺は2点出土しているが、それぞれ形態は大きく異なる。1点（2）は、球形の胴部に内湾する口縁部がつく。集落遺跡では、あまり見ない形である。やはり全体的に入念なヘラミガキが特徴である。もう1つの小型壺（3）は、扁平で肩の張った胴部をもち、やや外反する口縁部をもつ。やはり、全体的に入念なヘラミガキが施されている。

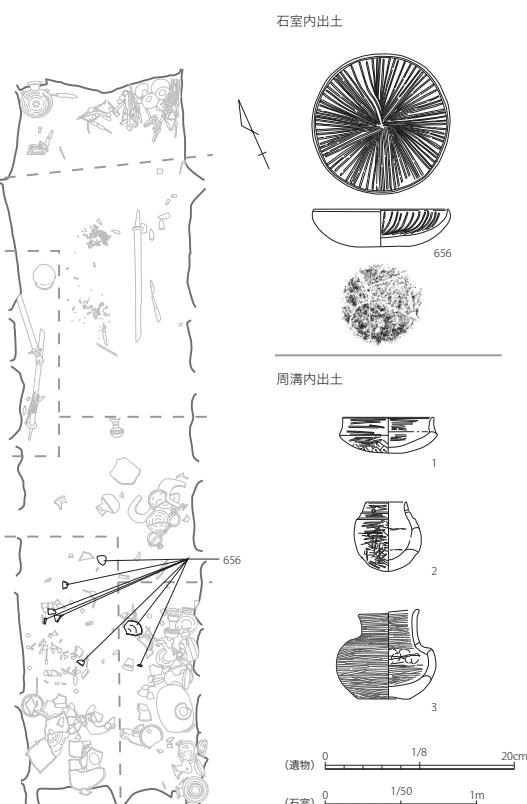
周溝出土の土師器については追葬もしくは、その後の祭祀行為に伴い私用されたもの可能性も残るが、集落遺跡ではあまり見ない形態などから、墓で使用する事を強く意識してつくられた土器と言える。

### 2 壺の変遷

石室から出土した壺の年代的位置付けを行うために、周辺における集落出土の土師器を概観し、その変遷について確認する必要がある。

著者は以前、山本恵一（1995）、木ノ内義昭（2001）の業績に導かれながら、富士山西麓に源をもち駿河湾へそぞく潤井川流域における古墳時代中期中頃から飛鳥時代の土器様相について触れた（佐藤2014）。

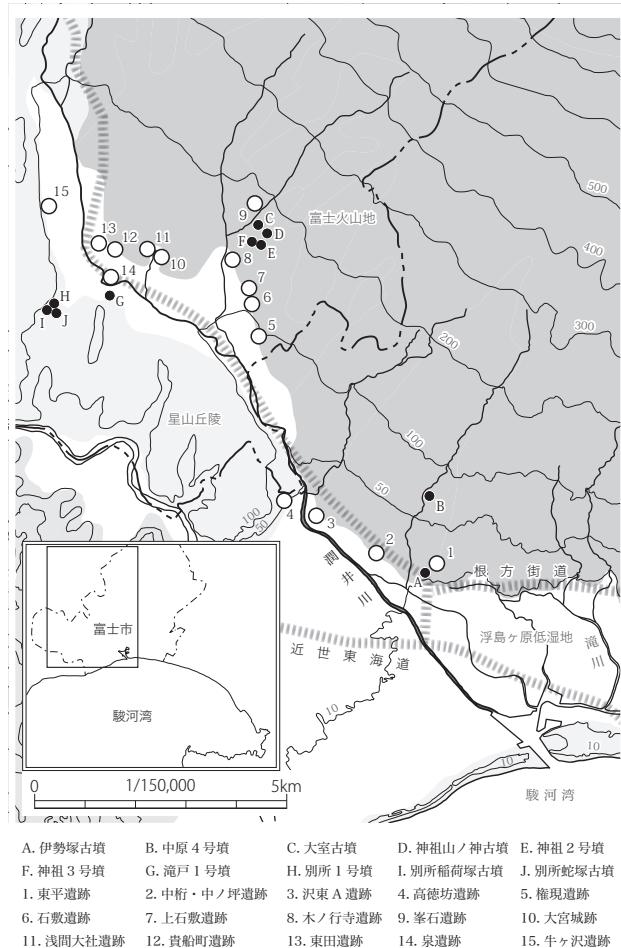
ただし、一括資料の提示に主目的をおいたため、各器種の型式変化については、述べる事が出来なかった。そのため本論では、壺の変遷について述べ、中原4号墳石室出土の土師器の年代を考える材料としたい。



第224図 中原4号墳土師器出土状況図

## 分類

- 坏A 浅い体部をもち、口縁部を短く外反させるもの。  
(木ノ内 坏B類)
- 坏B 「駿豆型坏」(池谷1999)とされるもので、底部外面に木葉痕をもち、平底もしくは、やや上げ底の底部からやや直線的に広がるもの。口縁部が内湾するものと、内湾しないものに細分される。(木ノ内 坏A類)
- 坏C 底部は丸底で内湾しながら口縁部にいたる。(木ノ内 坏B類)
- 坏D 比較的広い平底の底部をもち、やや内湾しながらたちあがるもの器高が低い。胎土が粗く、明るい橙色を呈することが多い。(木ノ内 坏D類)
- 坏E 須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部が上方に立ち上がるもの。
- 坏F 坏E同様、須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部がS字状に屈曲するもの。



第225図 潤井川流域の遺跡

坏A 浅い体部をもち、口縁部が短く外反する坏Aは、潤井川流域に須恵器が認められる様になるTK208型式期から見られる。沢東A遺跡第1次調査地点SB27では、須恵器頸や、後述する坏Bの「駿豆型坏」と共伴している。木ノ内(2001)は、この形態を甲斐系のものではないかと想定している。確かに石神・笠原(1999)によれば、TK73・216段階からこの器種がみとめられ、徐々に口縁部の外反が不明瞭になり、TK23・47型式期段階までは継続すると考えられている。しかし、口縁端部のみを外反させる塊は広く東日本にみられる技法・形態であり、その影響を甲斐に限定する事は出来ない。むしろ東北地方南部などの影響を考慮しなければならない器種である。いずれにせよ坏Aは坏B(「駿豆型坏」)などが多くみられるようになる以前から存在し、その後、継続的にみられる器種とはならない。

坏B 池谷(1999)のいう「駿豆型坏」である。ここで、その定義について整理しておく。

- 木葉痕の残る小さな平底から体部が内湾して立ち上がり半球状を呈す。
- 外縁調整は横方向のヘラミガキ、底部付近は板ナデ。内面は放射状のヘラミガキ。
- 胎土は比較的きめが粗く、白色粒子(カワゴ平パミスか?)を多く含む。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)。池谷によれば、TK216型式期段階以降にみとめられ、形態的には大きく変化せず、MT15型式期段階前後でみえなくなるとの事である。

潤井川流域における坏Bは、前述のTK208型式段階の沢東A遺跡第1次調査地点SB27においてみられ、その後、TK10型式期に位置づけられる中柄・中ノ坪遺跡第1地区第41号住居跡までみとめられる。その出土量からみればMT15型式期を最後に減少し、TK10型式期においてみえなくなると言う事が出来る。

坏C 底部が丸底で内湾しながら口縁部に至る器種である。木ノ内が「丸底内湾坏」としたものである。また池谷は坏Aとし、駿豆型坏と同じTK208型式期にみとめられ、MT15型式期もしくはもう少し残存すると考えた。沢東A遺跡SB27では坏A・Bとともに坏Cも共伴する事から、TK208型式期にはみられる様である。おそらく、坏Bなどよりも以前から存在した器種と考えられる。その後、丸底から平底に変化することで坏Cとしては駿豆型坏同様MT15型式期前後でみえなくなる。

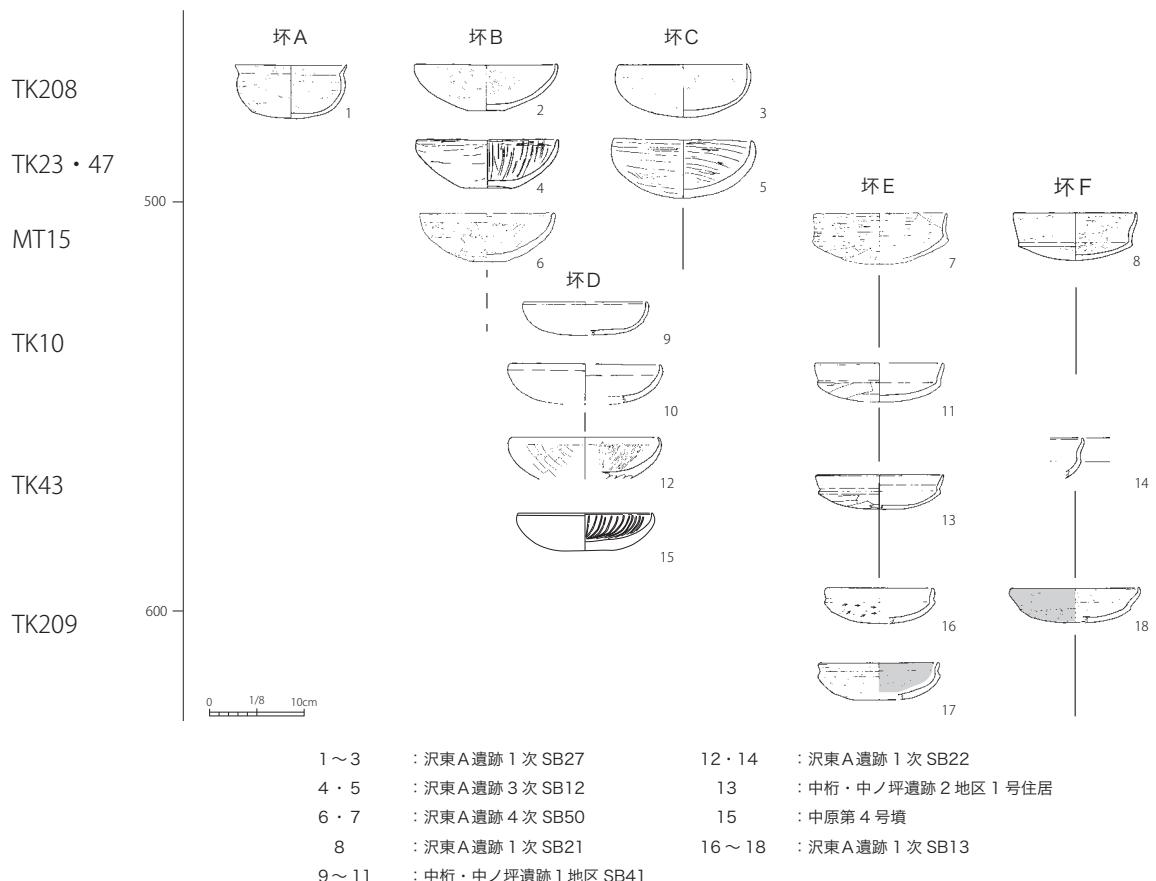
坏D 比較的広い平底の底部をもち、器高が低く立ち上がるるものである。それまで丸底であった坏Cや同じく放射状ミガキをもつ坏Bが消滅し、坏Dが出現するが、坏B・C両者の影響下に坏Dが出現したと理解できるかについては検討も必要になる。胎土が粗く明るい橙色を呈するのが特徴で、TK10型式期の中柵・中ノ坪遺跡第1地区SB41や、TK43型式期の同遺跡第2地区1号住居などにおいて認められる。しかし、TK209型式期になると坏のバラエティが豊富になる一方で、この器種は一般的にみられなくなる。

坏E 須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部が上方に立ち上がるものをいう。木ノ内氏の坏C1類・C2類に該当する。

確実にTK23・47型式期までさかのぼる例はなく、MT15型式期に位置付けられる沢東A遺跡第4次SB50や、同遺跡第3次SB3にみられるようになる。当初、器壁が薄く、調整も丁寧で、須恵器の忠実な模倣から始

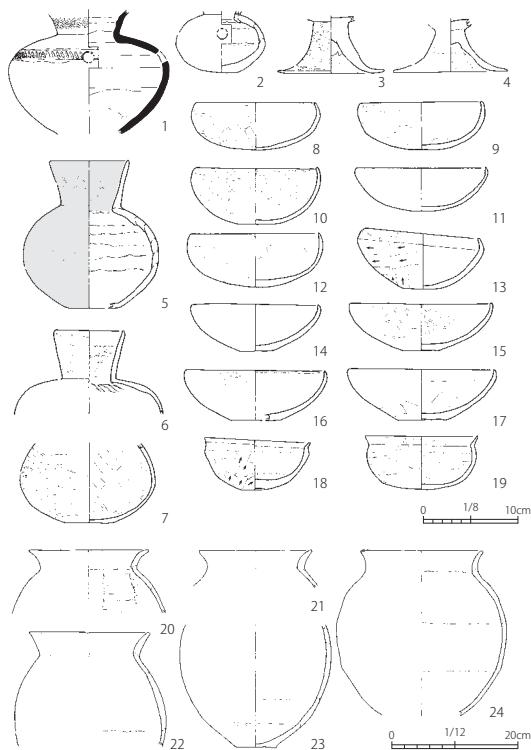
まったが、時間を経るにしたがって、厚みを増し調整もあらくなる。TK10型式期段階において、すでにミガキを省略し、ケズリのみの調整となる。TK209型式期になり坏Fが多くなり、出土数が減少するものの、一定量残る。

坏F 坏E同様、須恵器坏蓋模倣の坏で、口縁部がS字状に屈曲するものをいう。木ノ内氏の坏C3類・坏C4類をいう。MT15型式期に位置づけられる沢東A遺跡第1次調査SB21にみられる。TK23・47型式期にさかのぼる可能性のある資料として伊勢塙古墳出土の資料があるが(富士市教委2012)、確定的ではない。むしろ一般的に多くみられる様になるのは、TK209型式以降である。この段階の坏Fは外面赤彩や内面を黒色処理したものが多くみられ、TK209型式期～飛鳥II・IIIを通じて坏のなかで中心的な器形として存在する。



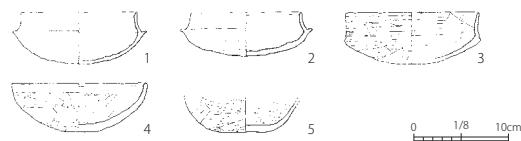
第226図 潤井川流域における坏の変遷

TK208～TK23・47  
沢東A遺跡 第1次調査地点 SB27

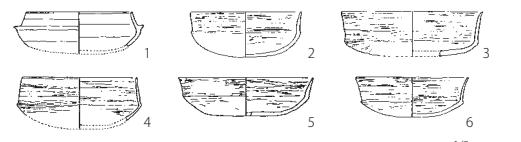


MT15

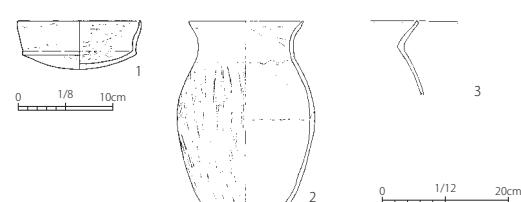
沢東A遺跡 第4次調査地点 第50号住居跡



沢東A遺跡 第3次調査地点 第3号住居跡

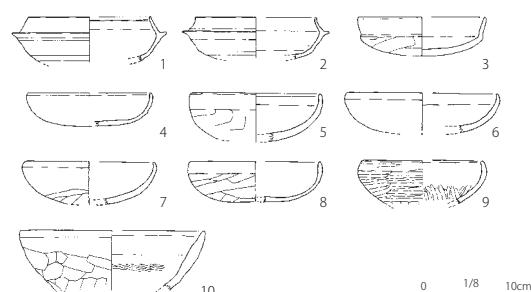


沢東A遺跡 第1次調査地点 SB21

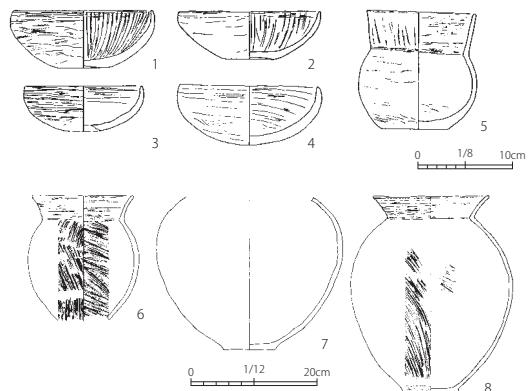


TK10

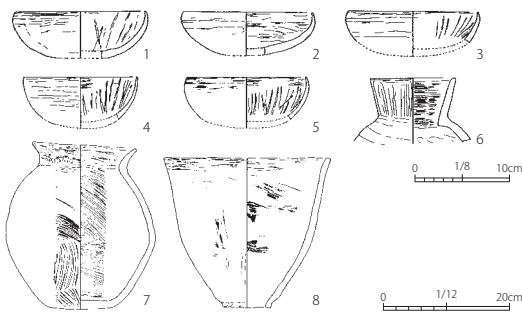
中行・中ノ坪遺跡 第1地区 第41号住居跡



沢東A遺跡 第3次調査地点 第12号住居跡

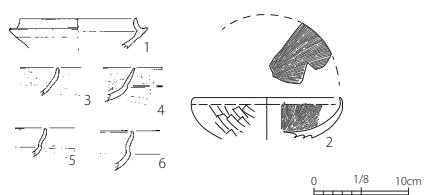


沢東A遺跡 第3次調査地点 第17号住居跡

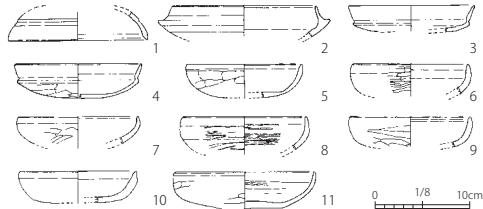


TK43

中行・中ノ坪遺跡 第1地区 SB22

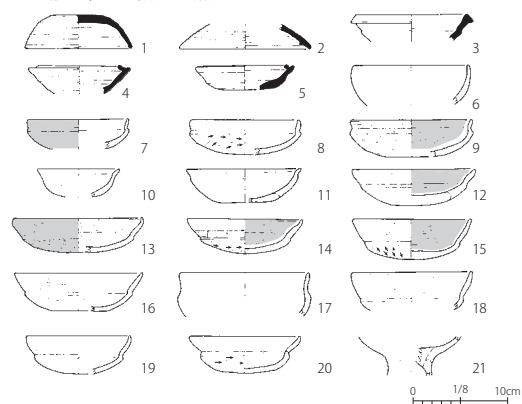


中行・中ノ坪遺跡 第2地区 第1号住居跡



TK209～

沢東A遺跡 第1次調査地点 SB13



第227図 潤井川流域の土器様相

### 3 位置付け

4号墳石室から出土した唯一の土師器である壺は、前述の分類にしたがうと胎土の粗さや特徴、形態的特徴から壺Dとなる。内面の放射状のヘラミガキや底部外面の木葉痕は壺Bとした「駿豆型壺」の特徴のなごりと考えられるが、底部の大きさや、その異常なまでの底部の厚み、低い器形は、壺Cとした「丸底内彎壺」の影響であろう。

前述の通り、この壺DはTK10型式期・TK43型式期においてみられるものの、TK209型式期には認められないか、認められても一般的ではない。類例と同じ潤井川流域でみるのであれば、TK43型式期に位置づけられる沢東A遺跡第1次調査SB22があげられる。この遺構からは本地域においてあまり広がらない須恵器壺身模倣の土師器壺が出土しており、壺Dと壺Fが共伴している。この壺Dは底部外面が欠けているものの、形態や胎土、内面調整にいたるまで4号墳出土品と酷似しており、同時期と位置付けられる。

周溝から出土した壺(1)は前述の須恵器壺身模倣の土師器壺であり、本地域における主要な器種組成とはならない。器壁も厚く、石室内から出土した壺の年代と大きな齟齬はないものと考えられる。一方、小型壺(2・3)は、集落からの出土例がなく年代的アプローチに限界がある。ただし、内側に向かって伸びる口縁部や頸部の段差の作り方、調整技法などの特徴は、TK209型式期前に位置づけられる沼津市中原遺跡4地区SB15に似ており、その前後の時期の土器と考えられる。

### おわりに

石室内から出土した土師器壺は周辺の集落遺跡出土資料との比較検討から、6世紀後葉、TK43型式期と位置付けた。土師器1点のみからの位置付けには、多少、慎重にならざるを得ない部分もあり、もう1段階古い可能性も残るが、新しい段階(TK209型式期)に位置付ける根拠は現段階ではない。

### 参考文献

- 池谷 初恵 1999「駿河伊豆型平底壺について」『東国土器研究』第5号
- 石神 孝子・笠原 みゆき 1999「甲斐における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号
- 木ノ内 義昭 2001「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相－主として律令時代富士郡衙推定域の出土遺物から－」『東平遺跡(第16地区(三日市廃寺跡)、第27地区発掘調査報告書)』富士市教育委員会
- 佐藤 祐樹 2014「潤井川流域における須恵器流入以降の土器様相」『沢東A遺跡 第1次』富士市教育委員会
- 富士市教育委員会 2012『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成11・12年度－』
- 山本 恵一 1995「静岡県下の6～7Cの土師器－駿河東部・伊豆北部の現状について－」『東国土器研究』第4号